

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号： 32689
研究種目： 奨励研究
研究期間： 2019～2019
課題番号： 19H00006
研究課題名 米国へ：コロンビア・米合作映画にみる中南米不法女性移民の表象

研究代表者

矢田 陽子 (Yada, Yoko)

早稲田大学・文学大学院・大学非常勤講師

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 310,000円

研究成果の概要：2019年秋に早稲田大学文学部多元文化学会にて口頭発表、その後、同学会で研究論文『米国へ：運び屋・ミューラー搾取の構造に生きる中米コロンビア女性の表象』を発表し、2020年3月に学会誌は刊行。その後、英国の母校であるエセックス大学内の学会発表で、カトリック信仰からの分析を深めたものの発表を予定していたが、新型コロナウイルスのパンデミックが始まり、2020年3月の学会は中止。再開の目処が立たなかったものの、その後9月にオンラインで口頭発表。コロンビアの麻薬組織に利用されるミューラーとカトリック信仰の関係性を考察した論文を2021年内に寄稿する予定になっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中米コロンビアの17歳の少女が麻薬カルテルの駒となって、コカインを飲み込みNYに不法入国する表象を分析した。現代の米国にとって中南米不法移民は大きな社会問題であるが、貧しい中米諸国の労働者階級にとっては米国へ渡ることこそ最後の砦である。事実に基づいた不法移民を描く映画作品は少なく、また、麻薬密輸に手を染める中米少女の決断の背景にいかなる問題があるのか、そしてどのように決断するのかについて考察できる作品は皆無と言って良い。そして、その表象を中南米文化の根幹を形成したともいえるカトリック信仰と思想の観点から分析した研究は非常に少なく、その意味でもこの研究は大いに意義あるものとなったと言える。

研究分野： 地域研究

キーワード： 地域研究 表象

1. 研究の目的

この研究の目的は、コカイン袋62袋を飲み込んでコロンビアから米国への不法入国を試みる女性の姿を描く映画作品の女性表象を分析し、中南米諸国に共通する米国への不法入国・滞在と若い少女等を搾取していく麻薬カルテルの存在などを考察しながら、なぜ若い少女等がそのような搾取の道に足を踏み入れるのか、その背景にあるものを、思想・宗教の観点から分析することであった

2. 研究成果

この研究はコカインの密輸に手を染めることを決断する女性たちの決断の背後にある心理、思想を、通常の「経済困窮」というバックグラウンドから分析するのではなく、文化的に探っていくものであった。ゆえに、研究を進めるにあたり、新訳聖書、旧約聖書はもちろんだが、特に分析に使用したのは、カトリック教会が難解な教義を信徒向けに解説した「カテキズム」である。

分析に使用した映画作品は、監督が1000人の元麻薬密輸者（ミュール）に直接インタビューを取りまとめて脚本にし、マリアという主人公を作り上げた。主人公マリアのセリフには多くのコロンビアの女性ミュールの思いや考え方の傾向が反映されているとの想定をした。コロンビアというカトリック信仰の強い文化背景を考えれば、カトリック教会が何世紀にも渡って人々の無意識の思考や決断に深く影響を及ぼしているであろうという仮定をもって、主人公マリアや彼女を取り囲むコロンビア人女性の表現をカトリック思想から分析した。そこから明白となったのが、「家族のため」、「母」、「責任」という表現が繰り返されていた点である。主人公マリアに家族が経済的負担を強いる場面では、常に「家族のため」という表現が連続的に使用され、最終的にマリアを説き伏せる。つまり、「自分よりも家族を優先させるべき」という思考がマリアに存在するのである。

カトリック教会の教義「カテキズム」には、「自己犠牲の精神」、「家族を最優先」、「親を尊重することこそイエス・キリストを信じること」という項目が存在し、キリストへの信仰と親への尊重を同一化する点はカトリック信仰の本髄ともいえる。本来、キリスト教は、犠牲を肯定するユダヤ教をベースとしながらも、ユダヤ教を反面教師として「犠牲なき宗教」として誕生した。十字架にかかったイエス以外の犠牲者を出さないとしたキリスト教ではあるが、本来の教義の意図とはかけ離れた結果が、後世の人間の利己的な解釈がなされてきたことを示している場面ではなかろうか。主人公マリアは、常日頃から家族を支えなければいけないという抑圧を受け止めながらもそこに矛盾を感じている17歳の少女であるが、ふとしたキッカケから、麻薬を飲み込んで米国への麻薬を密輸して大金を得る道を選んでしまうが、それは家族への貢献を果たすためであると同時に、麻薬カルテルという新しい搾取の場に自ら足を踏み入れる命を危険にさらす構造に足を踏み入れたことを意味する。つまり、搾取の連鎖であり、その根源となるのが自己犠牲的精神である。

この作品の主人公はこの家族に自己犠牲的行動を強いられることに大きな矛盾を感じており、それを表す場面も多い。自分一人でも教会に赴いている場面は主人公の信心深さを伝えるものであり、彼女の思考の源流にはカトリックが存在すると読み取れる。

物語の結果として、主人公は米国で麻薬カルテルに密輸分のコカインを渡した後、コロンビアへの帰国便には乗らず米国に不法に留まることを選択するが、それは現行の米国における中南米不法移民問題を忠実に表している場面でもある。主人公は米国で長く不法移民として生きその後正規にグリーンカードを取得し合法的にコロンビア女性と出会い、影響を受ける。生きる場を変えることで視点に変化が起き、これまでの思考—自己犠牲的精神—から解放される可能性を示唆して物語は終結する。

この研究で分析した表象は、顕在する中南米からの不法移民の流れと巨大麻薬密輸によって搾取され続けている中南米の人々の姿と伝えるだけではなく、中南米からの女性不法移民が持つ思考回路とその根底に根差す要素-カトリック要素-との関わりを探究したものであり、通常、経済的困窮要因のみが焦点となるなかで、思考・思想・宗教という全く異なる角度からこの恒常的な現状の背後にある不動の要素を読み解いた。

この研究は、2019年11月に早稲田大学多元文化学会において学会発表をし、その後、査読を経て同学会誌「多元文化 第9号」で研究論文として発表(2020年2月)。この国内での学会で織り込めることができなかった論点を加えて、英国・エセックス大学が実施する学会で発表予定であったが、新型コロナウイルスによるパンデミックの為に延期された。そのため、この奨励研究も1年間の延長を申請し承認され、その後英国の学会はオンラインによる発表が行われ、現在、研究論文は査読中である。

この研究を奨励研究として申請した当時はトランプ政権であった。バイデン政権に変わり、米

国の移民政策、特に米国国境を越えようとする中南米からの不法移民に対する処置は、トランプ政権以前のものにすでに回帰している。それは米国と中南米諸国にとって進展でも後退でもない。問題は何も恒常化しており、米国側も、中南米側も何一つ解決策を見出していない。今後の研究もこのテーマを継続し、不法移民のステータスから合法に米国で暮らし市民権を得た中南米女性達の生き様を描いた映画・文学で描かれる姿を分析していくつもりである。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 矢田 陽子	4. 巻 9
2. 論文標題 米国へ 運び屋ミューラー搾取の構造に生きる中米コロンビア女性の表象ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多元文化	6. 最初と最後の頁 65、87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢田 陽子
2. 発表標題 米国へ、搾取の構造に生きる中米コロンビア女性の表象
3. 学会等名 早稲田大学文学学術院 多元文化学会
4. 発表年 2019年～2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名